

喪失の音

柚子と樹里

「私が望む最期」

寒くて

静かな海辺で眠りにつきたい

近づいてくるような星と月を最期に見て

最期まで穏やかな波の音聴くの

私の体が

月光に仄かに照らされる

最期に思うことはなんだろう

穏やかな気持ちに包まれて眠りたい

私を最初に見つける人

それは

あなたがいい

いつまでも目覚めない私を見て

あなたが私の為に流す涙が

月光に照らされて

冷え切った私の体に落ちる

ねえ

綺麗だと思わない？

これは

私が一番望む最期

何故、この詩を送られてきた時に、彼女の求めていたことに気づかなかったのだろう。何故、この詩を、一つの作品として捉えてしまったのか。

あの時気づいて、支えてあげてれば、こんなことにはならなかったのかもしれない。彼女も死なず、僕も悲嘆に暮れることも無く。

人生とは、些細なことが、劇的なことの発端になりうるものだ。

彼女は間違はなく、僕に救いを求めていた。

僕に気づいてもらえなかった彼女は……絶望的になったはずだ。彼女は絶望のさなか、死んでいった。それを想像するだけで、僕も絶望的になる。絶望とは、なんと大きな感情なのだろう。いや、もうこれは感情と呼べない。「空間」だ。ここでは、人間は、いつも一人だ。ここでは、なにものも色をもたない。彼女が最期にいたのは、こんな所なのだ。彼女は、死ぬことで、ここから解放されたのだろうか。

喪失の音は聞こえない。でもそれは、いつまでも鳴りつづける。僕が生き続ける限り。

最近、サークルの新生で気になる子がいる。名前は伊東音子。自分たちで言うのもなんだが、一応有名のうちに入っている国立大学の文学部で、文芸サークルに入っている。僕は将来小説家を目指して、今まで数々の作品をメンバーに読んでもらった。皆は辛辣に評価する。「この表現は文学じゃないよ。」「細部ももつと設定しなくちゃ。」「そもそも設定が変。」等等。その度、ああ、やっぱ僕には才能がないのか、と夢を諦めそうになる。でも、良い本を読むと、それに感化され、「僕もこんな風に、人の心を揺さぶる小説を書きたい!」と意気込む。

サークル内では、2ヶ月に1回、自分たちの作品を載せて図書館に置く文集『黎明』がある。サークル内で選ばれた5作品のみが載せられる。生憎僕は、1年で入部して以来、2度しか入選した

ことが無い。その彼女は、6月の分に掲載されていた、3作品を読んだだけが、彼女は詩を専門としていたようだった。彼女の詩からは、瑞々しい感性が伺えた。言葉の選び方にも、長けていたと思った。1番強く感じたのは、——心の不安定さ。全身の皮膚が、過敏に反応しているかのようだった。何故、この子は生きていられるのだろうかと思わされる。

こういうことを彼女に伝えてみた。すると彼女は

「……私の心の叫びをぶつけているんです。」

と、伏し目がちに言った。彼女の内面は、外見にも表れていた。いかにも儂げで、線が細い感じ、月光に照らされる白い花のような人だった。小柄で、二重の目、鼻は小さいが整っていて、唇も主張しない大ききだった。色白の肌が、彼女の純潔さを表しているかのようだった。

彼女をよく見かけるのは、図書館だった。決まって1人で、3階の奥の閲覧席で本を読んでいた。何を読んでいるのかはわからなかった。ただ、いつも違う本を読んでいることだけはわかった。

思い切って聞いてみたことがある。

「伊東はいつも何を読んでいるの？」

特に親しいわけでもない僕からの質問に、彼女は瞳をぱちくりとさせ、こう答えた。

「漱石と太宰が大好きです。」

「へえ……若いのに珍しいね。ああ、でも、文学部で文芸部だもんな。納得。」

「日本文学を専攻するつもりです。」

「そんなに好きなんだ。」

「はい、漱石は心理描写が巧みだと思います。『猫』のアイロニーも好きですし、特に『こころ』

は、一行読んだだけで、『こころ』の世界観に浸れます。」

「へえ……じゃあ太宰は？」

「彼の文章は、優しく上品で知的だから、筆者を伏せられていたとしても、すぐわかると思います。彼の人柄も、私は好きです。」

「心中、したんだよね。」

「はい。とても哀れな人だと思います。魂すらも救われてないんじゃないかな、と思います。タイムスリップできるなら、彼のところに行つて、抱きしめてあげたいくらいです。」

ここで、伏し目がちだった彼女の瞳は僕を捉えた。

「私、この前の黎明に載っていた先輩の『アロエヨーグルト』好きです。」

「あ、本当に？ 嬉しいな。僕にしちゃ珍しく入選できたのに、相変わらず皆の感想は辛辣だったよ。」

「そうですね、確かに問題点はあると思いますが、でも……他の人に無い感性で他の人が書かないようなものを、書いてらっしゃいますよね。あの作品で好きなのは、心を固く閉ざした主人公が、父親の買ってきたアロエヨーグルトでそれを溶かされる、というところです。日常のものが、救いになる時もあるんですね。」

彼女ときちんと話したのは、これが初めてだった。印象は——とても深い人。とても澄んでいるが、深くて底が見えない、そんな川を思い出させる人だった。

ある日、冷蔵庫に牛乳のストックが無いことに気づき（僕は毎朝欠かさず牛乳を飲む）、近くの

コンビニに歩いて行った。僕は、大学前の寂れた商店街通りに立てられたアパートに、1人暮らしをしている。

夜だということを忘れてしまいそうな位明るい店内だが、時計見ると間違いなく20時過ぎだった。僕は、牛乳の銘柄には特別こだわらない。その店で1番安いものを買う。今日もそうだった。

コンビニの袋を下げて、店を出る。明暗の差が激しく、人間も順応していくのにたいへんだな、ふと思った。この、コンビニのやけに明るい照明が、その人にぎりぎり届いてその姿をあらわにする。それは、伊東音子だった。今日はサークルの日でもないのに、こんな時間まで、いったい何をしていたんだ？ しかも、大学から大学駅までの道のりは、意外と長い。危ないじゃないか。僕は迷わず走りよった。

「伊東」

彼女は突然呼び止められ、上半身が反射し、驚いたことがわかった。

「せ、先輩。こんばんは。」

「こんばんは……こんな時間までどうした？ 今日サークルなかっただろ？」

「は、はい。今までずっと図書館で本を読んでいたんです。」

「今まで？ ずっと？」

「はい……あの、私夢中になると時間忘れちゃうほうなので……いつもは閉館前に携帯のアラームを設定してるんですけど、今日はその携帯を忘れちゃって……」

彼女の本への傾倒ぶりは尋常じゃなかった。

「何読んでたの？」

「……自殺してしまったネットアイドルの『南条あや』という人の日記が、出版されたものです。」

「そういうのも読んだね。」

「純文学に限らず、色々読んでいますよ。」

「自殺した人の手記かー、どうだった？」

「すぐく明るく書かれていて、日記の中では生きているのに、現実ではもう亡くなっている、というところが、認識しづらいです。あと、親近感の湧く文体だったからでしょうか……自分と同じ匂いがしました。」

「そうなんだ。凄く暗くて重いイメージがあるんだけど……違うみたいだね。」

「はい。読みやすいですし、実際売れているみたいですよ。」

「それをこんな遅くまで、学校の図書館で読んでいたんだ。」

と僕が苦笑交じりに言うと彼女は、慌てて、

「わ、私学校の図書館が好きなんですよ。クーラーがきいてて、静かで狭くて」

「狭くて好き、か。なるほどね。ところで、今回も黎明に掲載されていた伊東の作品、興味深かった。」

「ええと、『深い孤独』、でしたっけ。」

「そうそう。『私はいつでもひとりぼっち——』」

僕がこうはじめると、彼女も一緒に朗読し始めた。

何をしていても

誰といても

何処にいても

ひとりぼっち

あなたと繋がっている時でさえも

ひとりぼっちなの

私は何処に行けば

救われる？

朗読し終わると、お互い目を見合わせて、くすつと笑った。

「本当の孤独って、体と体が繋がっている時でさえも、感じてしまうんじゃないかな、と思って……。それって……絶望的ですね。」

僕は、隣にいる、このまだ少女に近い女性を守りたい、と思うと同時に、壊してしまいたい、と思った。そして、思わず出た言葉が、

「伊東、今度の日曜日空いてる？ どっか行かない？」

だった。反応が怖くて、彼女を見れなかった。でも、

「はい。連れてってください。」

の返事から、嬉しさと恥じらいが感じられた。突然すぎたことを、少々後悔していたが、僕は内心狂喜乱舞だった。

ドライブに行こうということになって、どこに行きたいかと聞いたら、花公園がいいと言った。

僕は、伊東と2人で行けたら、どんな所でもよかったので、快諾した。その夜は、嬉しさで興奮して、なかなか眠れなかった。もしかしたら、彼女は、僕のものになるかもしれない！

生憎、日曜は今にも雨が降りそうな曇天だった。日にちを延ばそうかと電話したが

「今ラベンダーが見頃なんです。来週は、私用事があつて……。」

こんなこと言われたら、いいよとしか言えない。この子は、弱さと言う、圧倒的な強さを持つていた。

案の定、花公園は、日曜日だというのに、園内はがらがらだし、肌寒いし、最悪のスポットだった。でも逆に、これが天気のいい日だったら、貸切状態の花公園でのデートなんて、でき過ぎていい。この位がいいのかもしれない。

公園入り口から、大きく右と左に分かれている。ラベンダーは左手にあり、向こう側まで、広がっていた。

傘をさして、しゃがんで、ラベンダーを優しく自分の鼻腔に寄せ、香りを嗅ぐ女を見て、僕は一つの作品ができた。

ハーブとあなた

ハーブの香りを嗅ぐあなたは美しい

そのこげ茶色の髪が

その長くて真っ直ぐな髪が

その白い手が

あなたの美しさを際立たせる

ハーブを持って歩くあなたは美しい

風にしなやかにびく髪が

歩く度にゆれるスカート裾が

あなたの美しさを際立たせる

ハーブとあなたは美しい

この時期の見頃は、ラベンダーだけだったらしく、僕たちはそこで手作りの、変わったバーガーのようなものを食べると、お土産屋を見て、ドライブを兼ねて遠回りして帰ることになった。

快晴だと、絶好のドライブウェイになりそうな山道を走らせる。霧が凄かった。幼い頃読んだ本を思い出した。霧の向こうの別世界に行くという内容。僕たちも、このまま霧の中に迷い込んで、知らない世界に行けたなら。

「霧ってなんかファンタジーの世界に入ったみたいで、幻想的ですよね。」

2人とも同じ事を考えていたなんて。出かけるのは、快晴の方がいいとは限らない。むしろ、霧でよかった。彼女は霧が似合う。霧の中から、ふわーっと現われそうだ。

助手席に座っている彼女を見て、僕は、この子を自分のものになりたい！ と強く思った。言うなら今だ。この霧の中で。

「伊東。僕と付き合わない？」

こう言った後、言葉はなんて大きな力を持つんだろう、と思った。このたった一言で、僕たちの関係が決まろうとしているのだ。緊張の瞬間は、長い。自分がここまで小心者だとは思わなかった。「はい。私も先輩のことが好きでした。よろしくお願いします。」

僕の中で、霧は晴れた。